

## 目加田さくを先生の業績 3

### — 『花萬葉』 (春の花) から —

まだ寒い日が続きますが、早く暖かい春が来ることを期待して、前回に引き続き、『花萬葉』の目加田さくを先生の解説に導かれながら、万葉集の春の花の歌を見てみましょう。

#### 【春の花】

春の花と言えば、まず梅ですね。『花萬葉』に収録されている歌の中で、春の花の種類は22種類あります。その中で、梅は秋のハギに次いで二番目に多く歌われた花で119首あります。現在の元号「令和」は天平2年(730年)に大宰府で開かれた梅花の宴で詠まれた歌の序文から取られたものです。今回はその梅花の宴で歌われた32首の中の1首とそれにかかわる大伴旅人の歌1首をご紹介します。

うめ

◇はるやなぎ かづらにをりし うめのはな

たれかうかべし さかづきのへに

(壺岐目村氏彼方) (巻第五 八四〇)

(現代語訳)・春柳 かづらに折りし 梅の花

誰か浮かべし 盃(さかづき)の上に

(口語訳文)・かづらに折った梅の花を誰が浮かべたのであろう。

この盃の上に

◇うめのはな いめにかたらく みやびたる

はなとあれもふ さけにうかべこそ

(大伴旅人か) (巻第五 八五二)

(現代語訳)・梅の花 夢に語らく みやびたる

花と吾思ふ 酒に浮かべこそ

(口語訳)・梅の花が夢に語るには 風雅な花と私は思います。

酒に浮かべて下さいませ、と。

目加田さくを先生はこう言われています。

大伴旅人は壱岐目村氏彼方の歌（八四〇の歌）にすばらしいと感動して、八五二の歌はこれを発展させたものです。梅花の宴の席上、手折った梅の枝からハラリ散りかかった花びらが彼方の盃に浮かんだ、それを目ざとくうたいあげた彼方の1首、以来、旅人らが酒盃に梅の花を浮かべて飲む、素敵で雅趣が定着しました。何とすばらしい。万葉人は洒落ている！

(85 ページ)

※現代語訳と口語訳は澤潟久孝『万葉集注釈』中央公論社 昭和35年を参考



令和3年1月31日福岡城跡の梅  
(メジロも梅にひかれます)